

Eureka XII

六年制通信 №20 令和6年9月27日(金)号

一つ所には居続けられない

12日にコミュニティセンターで中学行事がありました。講評でも言いましたが、全体的に非常によかったと思います。特に三年生の演劇が秀逸でした。あの脚本には若者の成長を描く一つの普遍的なモチーフ（創作の題材）が入っています。将来どのような仕事に就くべきかを迷う若者が、全く違う世界で働く人々に出会い自分の進むべき道を見つけていくという物語ですね。外の世界を知ることによって、自分がいかに狭い範囲で考えていたかを知る、そういうモチーフは君たちにもわかりやすかったことでしょう。君たちは日々成長している、ということです。成長するということは変化していくということですね。今日の自分は昨日の自分とは違う、たった一日で大げさだともうかもしれませんが、君たちの若さなら本当にそれくらいの大きな変化が訪れることがあります。昔から「男子三日会わざれば刮目して見よ」と言いまして、特に男の子は本来精神的な成長が遅いので、その分一旦変化を始めると三日間という短い時間でも大きな成長を遂げることがあるというのですね。「刮目」とは目をこすってよく見るという意味です。考えてみれば中学で三年、高校で三年、合わせて六年ですから、君たちが入学時とは別人に成長していても驚くにはあたりませんね。昔今のSコース（当時はAコースと呼んでいました）の担任をしていた時、ちと情けない男子がいましてね。彼があるとき急に顔つきも変わって「先生、僕は歯医者になりたい。先生の言うことは何でも聞きます。今からでも間に合うでしょうか」と言ってきたことがあります。あまりの変貌ぶりに目と耳を疑いましたが、しかも高校三年生の夏ですからね、無理だろうとは思いつつ受験のスケジュールを考えて渡したら、彼はやり遂げて歯学部に入りました。若者は目標を持った途端こうも変わるものかと思ったものでした。教育の主体は生徒自身であるとはよく言ったものですね。

若いうちは、人は一つ所にぐずぐずいつまでも居続けることは出来ません。心も体も変化しているのですから。ですからその一瞬を切り取って、ああ、あいつはあんな奴だと評価を下すようなことも私たちは避けなければなりません。それは人間の成長というものに対する傲慢な態度だと言っていると思います。そういう評価を下そうとする自分も含めて日々変わっていくのですからね。仲間の成長と自分の成長と、両方を信じながら学校生活を送ることが大切です。

「人は一つ所にとどまらない」ことは鎌倉時代の初め、すでに鴨長明が『方丈記』の冒頭で語っています。今週のおすすめ本にも出てくるのですが、皆さん覚えているでしょうか。「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮か

ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとどまることなし。世の中にある人とすみかと、またかくの如し」ですね。声に出して読んでごらん下さい。800 年ほど前の文章なのに何となくわかってしまうでしょう。これって、すごいことなのですよ。英語ではまず無理です。英語を母語とする大学生でも 600 年ほど前のチョーサーを読もうとすれば特別な訓練を受けないと無理です。

「世の中にある人とすみかと、またかくの如し」を佐藤春夫は「世の中の人々の運命や、人々の住家の移り変わりの激しい事等は丁度河の流れにも譬えられ」と訳しています。余談ですが、この時代の人はそのなかに引っ越しをしたのですかね。私の感覚では日本人は住む土地を変えたがらない民族だと思うのですが…。

日本は幸せなことに川に恵まれ、ということは水に恵まれています。飲める水で洗車をしている光景は世界でも稀ではないでしょうか。小川のせせらぎなども昔から私たちの生活に密着していたことでしょうから、その水の流れを人生に例える発想も自然と生まれたのだと思います。『方丈記』の冒頭に何の違和感も持たないのも私たち日本人の人生観に合っているのでしょうね、きっと。君たちも河の流れのように、一つ所にとどまらず、変化していってください。

今週のおすすめ

・佐々涼子 『エンド・オブ・ライフ』 (集英社文庫)

佐々さんはドラマにもなった『エンジェルフライト』の著者です。私は前から『エンド・オブ・ライフ』を読みたかったのですが、やっと読了できました。京都は西賀茂診療所のベテラン看護師森山文則さんは在宅医療の訪問看護師として行く先々で絶大なる信頼を得て、これまで 200 名もの看取りをしてきました。佐々さんはこの本を「これは、私の友人、森山文則さんの物語」と言っています。森山さんが 48 歳の時に癌が見つかります。医療の知識があるだけに、そして訪問看護師として熟練の技術を持つがゆえに、森山さんも当然在宅医療を望むものと佐々さんは考えますが、森山さんは全く違う選択をします。佐々さんの戸惑いも正直に記されています。この本を要約することは非常に難しく、君たちに読んでもらうしかないのですが、読む年齢によって全く感想が違うだろうと思います。ですから手元に置いて、折に触れ読んでみて下さい。私の年齢になると病気で友だちを亡くすことは珍しくないのですがショックはありますね。ちょうどこの本にあるような亡くなり方をした友人がいて、しかも青春の舞台が京都ですから、いろんなことを思い出してしまいました。

私はこの本で「スピリチュアル・ペイン」という言葉を知りました。近代ホスピスの創始者シシリー・ソンドースによる痛みの分類だそうで、身体的な痛み、精神的な痛み、社会的な痛み、そしてスピリチュアル・ペインつまり魂の痛みがあると。余命宣告を受けて「自分の人生は何だったのだろう」と考えたり、自分の存在が無に帰すことを想像して絶望することを指すようです。人は必ず死にます。この本を読むと、どういう姿勢で死に臨むか、100 人いれば 100 通りあることがよくわかります。

BGM は JUJU の ラストシーン でした…。